

た先人たちの熱意をまず伝えたいと考えていますが、必ずしも神戸の大学を卒業したのだから神戸で活躍してほしいというわけではありません。深い見識と素養を身に付けグローバル社会で幅広く活躍してほしいという願いをもっています。

―深い見識と素養とはどういうものでしょうか。

久元 言語にはそれぞれ、民族が担ってきた歴史、思考様式、価値体系があります。それらを極めた上で、自分なりの幅広い視野をもち、グローバル社会を俯瞰する能力が必要です。私たちの世代は、米ソ冷戦の中で学生時代を過ごしてきました。当時は冷戦が終結すれば平和な時代が訪れて全てが解決すると考えられていました。ところが現実にはそうはならず、地域紛争、宗教的対立が頻発、悪化しています。学生はこの混沌とした時代に、世界へと船出していきます。大学生活の中で自らを鍛え、強靭さを身に付けなくてはなりません。

グローバル社会でたくましく行動する国際人育成を

―時代のニーズに添えての取り組みのひとつ、「国際コミュニケーションコース（ICC）」とは？

船山 コミュニケーションのプロセスを研究し、かつ実践的に言葉を使う力を付けるという目的で2009年に開設されました。1学年定員430名の中から面接、グループディスカッション、ICC志望動機のレポート提出のほか、TOEICの点数なども加味して、2年次から20名を選抜します。外大の中のエ



国際コミュニケーションコース(ICC)は船山学長が開設した

リート集団と位置付け、大学全体をけん引する存在になることも目的のひとつとしています。今のところは英語と日本語を駆使できることが期待される就職が多いようですが、今後は、グローバル社会でもっと幅広く活躍できる人材育成を目指したいと考えています。

―神戸市役所での活躍も期待できますね。

久元 外大卒業生を単に翻訳通訳業務に特化した部署に配置するのでは組織自体が伸びません。それぞれの分野でリーダー的な役割を果たす人



入学式で新入生にメッセージを贈る久元市長

材として期待しています。神戸市が国内の他都市、アジアの各都市との競争に勝ち名譽ある地位を占めていくには、語学力や幅広い見識をもつタフネゴシエーターが必要です。例えば

ポートセールスや客船クルーズ誘致などで交渉を担い、自身の能力を駆使して仕事をしたいですね。いずれは神戸市役所も「語学力のある人材だけが幹部になれる」時代がきます。

船山 市長のご期待に添え、神戸市の発展に寄与する人材育成のためにも、今日からは、「たくましく行動する国際人」をスローガンにしようと思います（笑）。

久元 期待するだけではダメですから、神戸市としてもできるだけ協力しようと、細やかな試みですが、各国の総領事、市内のグローバル企業、国際交流団体などからたくさんの方々が集まる「神戸新春国際親善パーティー」に昨年から通訳として外大生に参加してもらっています。ロシア語やスペイン語の通訳として入ってもらったり、いろいろな立場の人たちとコミュニケーションを取ったり。もちろん英語だけで会話が可能なのですが、母国語を通訳してくれる学生がいるということには各国総領事にもとても喜んでいただいています。

船山 学生たちにとってはとても良い機会になっています。その場の雰囲気体験するだけでも意義があります。教室に閉じ込めておくのではなく、こういった場をもっと提供していかなく



1986年、神戸研究学園都市に全学移転を果たし現在に至る